

分娩は産婦の心の体験でもあり、不安や恐怖との闘争である。ストレスは人生のスパイスといわれるが、陣痛の苦しみの体験は、人生そのもの、人生が凝集したものと考えられる。

● 分娩の陣痛の苦しみは、人生は苦であるということを教えてくれている。また、陣痛の苦しみは、子が生まれる喜びを感じるために必要な苦しみである。陣痛は、本当に人のために何かをするには自己犠牲が必要なことを教えている。愛とは自分の大切なものを相手にあげること、自己犠牲であることを教えてくれている。人間が共存するには自己犠牲が必要である。家族の共存にも自己犠牲が必要である。親になり大人になるということは、我慢強くなること、我慢強くなることはセルフコントロールできるようになることである。陣痛の苦しみに耐えて辛抱することは、人生の一つの目標として、セルフコントロールの完成があることを学ぶことのように思われる。セルフコントロールの完成は自己実現の完成である。これが真の自由であり、真の幸福であると考えられる。

● 分娩では、産婦が陣痛の苦しみを受け入れて、それに耐えてのりこえることが大切である。従来は、陣痛の痛みを軽減したり回避することに努力が払われてきたが、今後は陣痛のない陣痛間欠期に、より注目すべきだと考える。陣痛間欠期に十分にリラックスできれば、陣痛の痛みは相当軽減できると思われるからだ。

陣痛で苦しんでいる産婦を見ていると、何とか、陣痛の苦しみを軽減させるように援助して

あげたいと考えるのが人情である。しかし、余計な手出しは不要である。「待つお産」が注目されてきているが、分娩で待つということは、産婦の能力を認めることである。産婦が自分の体の中で起こる子宮の収縮力の強さに驚き、自分の体の中にこんな力があったのかと産婦に気づかせてあげることが大事である。

産婦のケアは、癌末期の患者に対するターミナルケアの対極点にある。しかし、どちらも心を大切にしなければいけない点では同じである。分娩では、子が人生のよいスタートをきるように、産婦が母親としてよいスタートができるように、親子の絆が強くて幸福な家族をつくるスタートがきれるようにケアする必要がある。

分娩中は産婦の不安感や恐怖感を少なくするように援助し、産婦が怒責するのをできるだけ少なくし、自分で自分の子を産んだという満足感を味わい、生きる力、子に対する深い愛情、子育ての自信も生み出すように援助したい。

分娩後も産婦の心に余裕を残して、分娩直後に母親が子を抱きしめて、やさしい眼差で子の目を見つめてあげたり、やさしく話しかけ、子を十分にかわいがってあげられるようにする。夫と一緒に、家族で楽しい時間をもてるようにする。

分娩が産婦の人生で最も感動的な出来事であるように、分娩のときできた家族の幸福の蕾が大きくふくらむように援助してあげたい。分娩はゴールでなくスタートである。